

# AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

こころのりんしょうa・la・carte (2008.03) 27巻1号:13.

【子どものチックとこだわり】チックはそのうちに治ると言われたのになかなかなくなりませんが、いつまで待ったらよいのでしょうか？

沖 潤一

Q  
5

チックはそのうちに治ると言われたのになかなかなくなりませんが、いつまで待ったらよいのでしょうか？

**A.** チックは、3歳から10歳（主に小学校入学前後）の男児に多く発症し、数週間から数カ月といった期間で症状が良くなったり悪くなったりします。大部分は、瞬目（まばたき）や首を振るといった単純運動性チックであり、出現してから半年から1年以内に消失することがほとんどです。病院に通わないチックが多く、頻度や予後は学校に依頼した調査が主となります。FallonとSchwab-Stoneは、6～12歳の子どもたちの10%にチックが見られたと報告しています。その他の調査でも小児全体の4～18%であり、10人に1～2人にチックが見られると考えるのが妥当でしょう。幼稚園から小学校低学年で出現してくるチックは、100人中95人以上が、何もしなくても1年以内に消失します。1年以上チックが続き、慢性運動性あるいは音声チック障害と診断されたり、トゥレット症候群と診断されたりする例は、1万人に5人ぐらいです。これらの報告のように良好な経過をたどるチックがほとんどであり、一喜一憂せず根気よく見守ることが大切です。

チック出現初期の段階で、一過性のものか、トゥレット症候群に移行する可能性が高いのかを判定できれば、よりの確なアドバイスができるはずですが。しかし、トゥレット症候群の子どもを振り返って検討しても、症状の出始めは小学校入学前後に瞬目、首振りといった単純運動性チックであり、初期にその経過を予測することは難しいものです。本人・保護者に安心を与えるため、初期から「チックはすぐに消失するから大丈夫」と強調しすぎると、瞬目だけだったチックが、身体をくねらせたり、大声を出したりするチックに広がるのが往々にしてあります。このようにして、医師-保護者の関係が気まづくなることは稀ではあ

りません。

医師自身も、チックの増減に一喜一憂するのではなく、子どもにチックがあっても構わないといったどっしりとした態度で、子どもや親に向き合うことが大切です。

## 参考文献

Fallon, T., Schwab-Stone, M.: Methodology of epidemiological studies of tic disorders and comorbid psychopathology. *Advances in Neurology*, 58; 43-53, 1992.

アンバー・キャロル, メアリー・ロバートソン (高木道人訳): トウレット症候群の子どもの理解とケア: 教師と親のためのガイド. 明石書店, 東京, 2007.

沖 潤一: チック障害, トウレット障害. *小児内科*, 36; 935-939, 2004.

NPO 法人日本トゥレット協会編: チックをする子にはわけがある: トウレット症候群の正しい理解と対応のために. 大月書店, 東京, 2003.

(沖 潤一/旭川厚生病院)